

野外教育における森林レクリエーションプログラムに関する研究
—山野実習の一環として実施した森林レクリエーション実践例—

小 田 慶 喜¹⁾ 中 野 友 博²⁾
三 浦 敏 弘³⁾ 伴 義 孝³⁾

Program study of forestry recreation as outdoor education

The example of forest recreation practice carried out as part of outdoor education

Yoshinobu ODA¹⁾ Tomohiro NAKANO²⁾

Toshihiro MIURA³⁾ Yoshitaka BAN³⁾

Abstract

The purpose of this study was to investigate the effects of outdoor education in college students who participated in a 4-days forestry recreation course, nature and outdoor school course. Forests and trees are vitally important to human society, and affect nearly every aspect of our lives. The importance of forestry recreation by the activity of university class is to visit real forest and experience the natural life style.

The forest recreation activities include eliminating weeds for afforestation of beech trees. In the outdoor education program we want to help improving the quality of environment and life style by students. It is important to consider carefully our spiritual health, social health, and even wellness life style through the forest recreation program.

The purpose of the forestry recreation program is to educate students and to study about the benefits of trees and natural environment. This program assists to

1) 姫路獨協大学
〒670-8524 兵庫県姫路市上大野7-2-1
Himeji Dokkyo University
Kamiohno Himeji Hyogo 670-8524

2) びわこ成蹊スポーツ大学
〒520-0503 滋賀県滋賀郡志賀町大字北比良字尾所1204
Biwako Seikei Sports College
Oso Kitahira Shiga-cho Shiga-gun Shiga, 520-0503

3) 関西大学
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
Kansai University
Yamate-cho Suita Osaka. 564-8680

recognize rural communities and to encourage our recognition of citizen involvement in protecting, expanding, and improving our forests.? The forestry recreation programs also produce a variety of activities that may effect to educate everyday life style.

From such a viewpoint, the usefulness of the forestry recreation program as physical education in the university was suggested.

I. はじめに

学校教育の荒廃が社会問題として注目を集め、これからの教育をどうすればよいか議論されている¹⁾。同様に、倫理観の形成や人格の形成に大きな影響を与えると考えられる家庭教育や社会教育も、その教育効果の低下の原因解明が研究の対象となりつつある²⁾。学校教育の成果を活かし、社会人として活躍が期待される企業においても、即戦力としての人材発掘に重きが置かれ、企業が責任を持つ人材育成や企業倫理に関する企業教育は、実施するゆとりが認められないのが実情である。鷺田³⁾は、教養とは人間関係の技術を身につけることであると述べ、ものを作る技術とか、利口に立ち回ってアブク銭を手に入れる方法とかではなく、人と人がうまくつきあえる方法を考えることのできる能力、特に家庭生活をきちんとうまく実践できる技術や能力に重きを置くことの重要性を強調している。

幼児教育や小学校教育、中学校教育、高等学校教育、大学教育の学校教育を通じて求められるものは、表面的な資格教育や技術教育だけではないことは周知の事実である。チェスターフィールド⁴⁾がまとめたように、学問でできない教育の重要性は、人間が生きていくために理解されなければならない重要な部分でもある。狭義の利潤追求を目標に置く、企業が求める人材教育に重きを置いた教育の弊害が、日本における学校教育を荒廃させる原因となっている事は、現代の社会問題として再考しなければならない重要な課題でもあり、意識改革が必要となる⁵⁾。特に、自然環境を破壊しながら大量消費を基本にして発展を続ける、現行の破壊型且つ消費型の経済の

発展様式は、次世代の子どもたちの生活環境を考慮した場合、無秩序に自然を破壊する行為を加速する可能性を秘めており、自然観を育てる教育は、人間社会が取り組まなければならない大きな課題となるのである⁶⁾。

藤田⁷⁾は、日本の教育はいま重大な岐路に立っていると指摘している。学校週五日制が導こうとしているゆとりや個性化は、家庭や社会が教育機能を十分に発揮している状況下で成立するのであり、社会とバランスの取れていない教育改革は、学校における教育の放棄につながる危険性を含んでいる。今谷⁸⁾が示すような、生活科や総合的学習が担う新しい学力を育てる教育、すなわち子どもたちが自分自身の目・耳・鼻・口・手・足などを通じて、豊かなかかわりをもつような多様で個性豊かな感受性や追求力や創造性を培う原体験を実践する教育は、手探りの状況で始まったばかりである。このような教育が実施される背景として、直観を育てる教育を軽視して、偏った知性教育のみが先行し、現代社会に多くの問題を発生させていると考えられている。幼児教育や小学校教育で考えられている教育成果は、それに続く学校教育や、家庭や社会において十分に理解され、継続して教育が引き継がれるという環境が、保持され推進されるという状況にないことも大きな問題である。

大学における教養教育の存在感の低下も、学生がものを見る目や自主的・総合的に考える力を養う機会の損失を加速している傾向にある。伴¹⁰⁾は、生活する身体という表現で人間の生活哲学を説き、生きる力の育成の重要性を強調しながら、大学教育においても教養教育としての身体を考える教育の重要性を示し実践している。伴¹¹⁾はさらに、大学での教育における体育学のかかわりの重要性を考えながら、教育とは何かを提示し、人間一人ひとりを構成する全細胞を活性化するような教育力を体育が示すことのできる可能性を示している。学友と芸術・文化活動やスポーツ行動を楽しむ、自然環境に恵まれた山野で二本足で歩くことを楽しむなど、余暇時間を個人の価値観や独自の個性を発揮する時間として活動し、身体運動をととしての教育を直視することが、教育力の低下にも人間疎外問題にも歯

止めをかける可能性を示している。

その具体的例として、多くの大学教育において自然環境の中での直接体験を重要視する科目の設定が考えられ実践されている。さらに大学の学部や学科の再編成や創設に際して、生涯学習コースとして自然体験活動についての理論や実習をカリキュラムに盛り込むことを検討している大学も増加している。小・中・高等学校における「生きる力」の育成の実践は、自然の中でおこなう自然体験活動や生活体験活動も教育分野でとりあげられるようになり、総合的学習の時間の内容として注目されている。特に、自ら考え自ら学ぶという課題解決型の学習方法は、大学教育の中でもますます導入され、教養教育の一環としての人間教育に関わることが期待される。

我々は、自然活動を従来の技術習得を中心とするスポーツや野外活動に環境教育の視点を入れたものとして、自然活動を体育の教育活動のひとつとして位置づけ、従来から実施されているキャンプ実習でもなく、スキー実習でもない新たな科目としてその展開を試みている。その結果「自然活動を、自然を教材や教室とした身体的活動だけでなく、非身体的な諸活動までを含めた活動」として大きく捉えることとし、自然の中での直接体験活動を重要視する実習形態の授業として展開している。その自然活動の教育プログラムとして実践を試みている「森林レクリエーション」について分析をし、大学の教養教育としての体育の在り方を検討した。

II. 自然活動実習（山野実習）実施の意義と目的

本研究の対象とした森林レクリエーションプログラムは、H.D.大学において実施された野外教育プログラムである。H.D.大学では、学内で実施するスポーツ文化実習（体育実技）と同じ評価を与える授業科目として、自然活動実習という自然のフィールドにおける実習形式の授業を開学当初から実施し、新設大学ではあるが、野外教育において15年の教育実践を蓄積してきている。森林レクリエーションプログラムは、冬期の雪上実習と氷上実習、夏期の海洋実習と山野実習の4実習を基本として、実習地の選択や

野外教育における森林レクリエーションプログラムに関する研究—山野実習の一環として実施した森林レクリエーション実践例

受け入れ条件等を考慮して、自然環境を理解する実習を展開していた時点でのプログラムのひとつとして、夏期の山野実習のコースプログラムとして考えられたものである。

H.D.大学が自然活動実習参加学生用に用意した自然活動実習の実施要項には、自然活動のカリキュラム化を積極的に取り入れた岸¹³⁾が以下のように示している。『本学では開学以来、水泳・スケート・スキーの学外体育実技（集中授業）を実施してきたが、今日的課題である環境としての自然と、われわれがどのように関わるか、また、参加する者が直接的な自然との関わりの中で、新たに自分自身や仲間と対面することを願って、1990年度から、自然の中に実習地を求め、それに相応するカリキュラム改革と共に、自然活動実習と名称を改めた。この三実習は、年々内容も充実して実習の成果をあげ、他大学ではあまり例をみない、本学独自の伝統を築きつつある。このような実績のもとに、今年度から新たに自然活動（山野）実習が開設され、より広範囲な自然活動実習が実施されることになった。自然活動とは、単に野外で運動をするというだけではなく、日常の人工的な環境を離れ、変化に富んだ自然環境の中で、人間も自然の一員として、自然との係わり合いを楽しみながら、自然を理解し、自然を愛し、自然を大切にす諸活動をいう。したがって、自然への挑戦や克服という野外スポーツとしての身体活動であっても、競技という観点よりも、自然を生かし、自然を理解するということに重点がおかれている。それは、非身体的な活動としての動物や植物、地形や地質、天体などの観察や自然環境に関する研究なども含め、自分で直接的に体験する諸活動の多くを含んでいる。この自然活動（山野）実習も、このような観点から計画されたものであり、フラワートレッキング（自然観察）、登山、カヤック、森林レクリエーションなどの特色ある活動が取り上げられ、山野をフィールドとした自然活動としてプログラムを構成し、山野を媒体とした自然活動として、多彩なプログラムで展開される。いうまでもなく、人間が自然環境のなかで活動をおこなう場合には、「集団の規則を守る」「安全性の確保」「自然の保全」が優

先されなければならない。楽しい活動の基本は規則を守り、秩序正しく能率的に行動することである。山野の自然活動では身体が危険にさらされることもあり、自分の安全は自分で確保することだけでなく、他人を守ることも要求される。自己中心的な「楽しめばよい」といった行動が広まれば、事故や自然破壊が増大し、自然活動という文化を貧しいものにする危険性がある。特に、自然環境は、国民の遺産として後世に引き継いでいくべきものであり、その責任はわれわれにある。本実習に参加の学生諸君は、このことを念頭において、自主的・協同的で積極的な活動を通して、自然活動の今日的課題についても認識を新たに、安全で楽しくお互いの交流を深めると共に、この実習がますます充実、発展する基盤を、諸君たちの手で築きあげてくれるよう期待している。』このような考えに基づいて、現地での実習期間の4日間だけでなく、学内においても実習の準備学習として、授業の曜日・時限を指定し、定期的に自然活動に関する授業を実施するに至っている。

Ⅲ. 森林リクレーションプログラムの実施内容について

自然活動実習（山野実習）のプログラムひとつである森林リクレーションを導入することとしたのは、実習地である白山の自然環境を理解する充実した授業の展開プログラム開発をすすめた結果であった。白山山麓の白峰村の中心産業のひとつである林業に焦点をあて、林業の営林作業を中心とした営林体験コースができないかという考えをもとにその展開が構想された。

石川県の森林レクリエーション協会の事務局に依頼し、自然環境活動に詳しい石川県の森林インストラクター関係者の意見を求め、その結果、林業に注目することは重要であるが、スギやヒノキといった用材として管理している人工林の営林作業ではなく、自然保護センターが新たに組み組んでいるブナ林の営林作業を対象とした方が、より充実した自然活動体験を実施出来るのではないかと結論に至った。ブナ林を取り上げている白山

自然保護センターへの連絡を取るとともに、自然保護センターが実施しているプログラム内容の研究・評価を実施し、プログラムの内容を十分に検討した。

ブナ林については、青森県と秋田県境に位置する白神山地のブナが世界自然遺産に指定され、環境教育の観点からも注目される植物として、ブナ林を自然活動実習の授業として取り上げることの重要性が認められた。白山自然保護センターの協力を受けながら、事前に自然保護センター主催の下草刈りボランティアへの参加等が試みられプログラムの内容が研究された。

さらに学生の宿泊地として、国営中宮野営場を利用してのキャンプ形式の宿泊を計画したが、自然保護センターの近隣にある出作り小屋を使用し、できるだけ伝統的生活環境をも体験できる方向に持ち込むことが良いとの方針を打出し、出作り小屋の宿泊体験活動にも取り込むこととなった。出作り小屋とは、冬期においては数メートルの積雪のため生活できなくなる地域において、山間部の田畑を耕作するために、夏期だけ移り住む形式の夏の農耕用住居である。移動手段が発達して移動が簡単にできるようになった現在においては、倉庫と化している事が多いが、今回宿泊を検討した出作り小屋は、充分整備されており宿泊体験が可能なものであった。出作り小屋での生活体験は、少しでも地元の文化や生活形態にふれることができると考え、所有者への積極的働きかけを試み、使用許可を受けることができた。(図1、図2)



(図1) 出作り小屋の外観



(図2) 出作り小屋の内部

森林レクリエーションプログラムとしての主たるプログラムを、ブナの
植栽林の下草刈り(図3)とし、導入部分
では本物の自然にふれること、ブナ林を取
り上げることの意義、自然林と人工林の違
い等について、ゲームやパーソナルコンピ
ュータソフト、大学周辺の自然体験活動を
通じて学生に問題意識を持たせるようカリ
キュラムが構成された。また、参加してく
る学生同士の人間関係もよりコミュニケーションが取りやすくなるよう、
仲間作りやお互いを理解できる様な活動を実習地でのネイチャーゲームを
積極的に実施することとした。



(図3) ブナの幼木の下草刈り作業

IV. 森林レクリエーションプログラムの実施内容について

実施プログラムの内容：3泊4日で実施される森林レクリエーションコ
ースの主なプログラム内容は以下の通りである。

(第1日目)

大嵐山ブナ林観察

ネイチャーゲーム(ネームトス、音いくつ、サウンドマップなど)

白山の自然・植物・動物について学習会

パソコンソフトを用いての森林学習

(第2日目)

尾口村尾添のブナ自然林の観察(防雪林、雪崩防止林としてのブナ林)

出作り小屋周辺観察

中宮野営場周辺自然観察

ネイチャーゲーム

ブナ・ブナ林について展示館自然観察員の講義

ブナ林に関するVTR視聴

展示館内において各自学習

蛇谷自然観察路探索

中宮野営場周辺でのナイトプログラム

出作り小屋宿泊での室内プログラム

(第3日目)

ブナ、ブナ林、ブナの植栽、下草刈りの必要性等について説明

下草刈りの方法、カマの使い方実践

下草刈り、ツル切り実施

カマの管理、砥石の使い方

クラフト「白峰のスギ板を使つての焼き板」

出作り小屋周辺の後片づけ

個人フリープログラム「沢の水とふれあう」

伝統文化かんこ踊り体験

(第4日目)

ディスカバー白峰村(実習宿泊地である白峰村内の散策、観察、交流)
の実施

最終日は、各コースの学生たちがよりコミュニケーションを取ることの
できるようにとの配慮から、全体で実施するネイチャーゲームを中心に構
成していたが、自然が育ててきた文化を引き継ぎ生活をしている白峰村を
体験することに時間を取ることを重視した。コースを離れて、2人以上の
新しい仲間とのグループで行動することで、村民との交流を深め、何かを
感じ取ることを期待して、「ディスカバー白峰村」と称する全体プログラム
を、実習宿泊地である白峰村内の散策、観察、交流を中心に実施した。

参考として示した訪問ポイントとして「・白山本地堂・白山ろく民俗資
料館・大嵐山ブナ林・牛首社の資料館(白山工房)・白峰高原ブナ原生
林・天然記念物「太田のオオトチ」・トチ餅ツアー「かんこの家」・白峰
温泉総湯・手取川総合開発記念館・桑島の里・白峰村のおみやげ・森林館
アリスト」など白峰村内の主要施設を示した地図を配付した。

森林レクリエーションコースを選択した学生には、森林レクリエーショ

ンプログラムを理解するために、次のような解説が講義中に示されている。「日本の国土の7割が森林が占めています。この森林の50%が材木としての林で、戦後の復興とともに広葉樹はどんどん伐採され、その後に用材としての針葉樹がどんどん植林されてきました。最近になって自然林としてのブナの林が見直され、青森県と秋田県の県境にある白神山地はブナの自然林(原生林)が、また鹿児島県の屋久島では原生林としての照葉樹林が世界文化遺産として指定されています。森林レクリエーションコースでは、このブナの林を育てる作業を通して、自然の豊かさやすばらしさを体験したいと考えています。実習地として選んでいる白山周辺は、ブナの自然林が多く残っています。また、ブナの植栽事業も官民共同で行われています。標高的にも600mとブナが生育できる土地で、下草刈りを行います。植栽されたブナの幼樹が立派に育つように、クズやススキ、タケニグサ、ヨモギなどの雑草をカマで刈っていく作業です。宿泊には、地元の方が農作業の際に利用する「出作り小屋」を利用させてもらいます。白山地方の生活文化に少しでもふれてみて下さい。」このような内容の授業が事前授業として実施されている。

学生に対する事前準備および注意事項としても、下草刈りの服装に特に注意を促すことを考慮して、帽子、タオル、イボ付き軍手、長袖、長ズボン、ゴム長靴等作業のしやすい服装を各自で考え、用意することが求められている。

さらに、事前学習事項として、ブナについての知識を持つことが中心とした学習を求められ、「ブナの幹は？木の葉は？樹皮は？樹冠は？実は？」などの質問に答えられるように、ブナ林についての大学図書館蔵書一覧を示し、各自が事前に調べることを求め、実習時にブナ林について各自の考えを討論出来るように準備させることにしている。

そのために学生に示したブナに関する関係図書の一例は、「ブナ林をはぐくむ菌類、金子繁・佐橋憲生編、文一総合出版、1998」「ブナ林の自然誌、原正利編、平凡社、1996」「ブナの放流?森は地球のお医者さん一、宮下正

野外教育における森林レクリエーションプログラムに関する研究—山野実習の一環として実施した森林レクリエーション実践例

次著、北斗出版、1995」「ブナの森を楽しむ、西口親雄著、岩波書店、1996」「ブナをめぐる、石橋睦美著、白水社、1995」「ブナ林に生きる—山人(やまんど)の四季?太田威著、平凡社、1994」「ブナ帯文化、梅原猛他著、思索社、1985」「日本のブナ帯文化、市川健夫他編、朝倉書店、1984」「ブナの山々?東北の山からのメッセージ、根深誠他著、白水社、1990」「ほろびゆくブナの森、工藤父母道著、岩波書店、1980」などである。

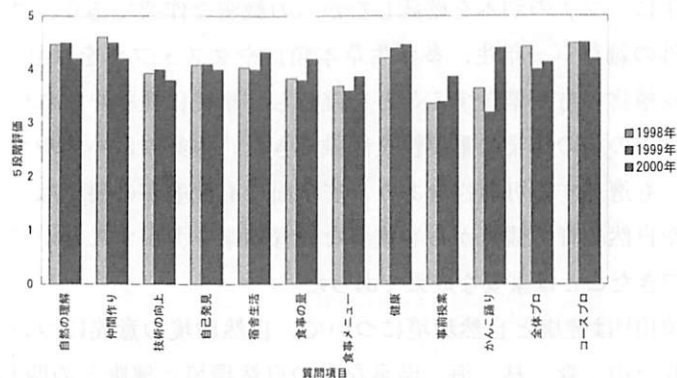
V. 森林レクリエーションコースにおける調査の結果

自然活動実習に参加した学生を対象にアンケート調査を実施した中より、平成10年、11年、12年に実施した白山山系における自然活動の山野実習「森林レクリエーションコース」に参加した学生を中心に分析を実施した。

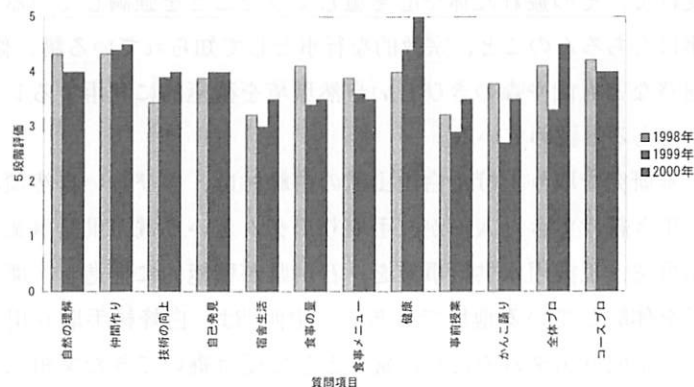
平成10年度は、すでに実施していた自然活動実習をより充実するため、学内での事前・事後の授業を実施しながら、授業プログラム内容の改善を再検討した年である。(研究対象とした自然活動の授業プログラムは、通年科目として夏期と冬期の2実習、2単位の科目として開講し、夏期及び春期の休暇を利用して実習を実施する授業として開講されており、定期的に学内において隔週で講義形式の授業参加も要求した授業形態を展開した。特に夏期の山野実習や海洋実習においては、冬期の実習に向けての学内での授業において、実習事後の授業展開を試みる事が可能であった。平成14年以降は全授業が前後期分離型の授業様式となり、事後の授業実施が不可能となった。)

調査内容は実習の目的としてすでに実施していた「自然についての理解」「仲間づくり」「コースにおける技術の向上」「自分自身についての発見」の4項目についてのアンケートを学生の達成度、満足度を5段階評定で回答を求めたもので、実習最終日の閉講式直前に配布し、記入後回収した。また、アンケートと同時に自由記述形式の感想文の提出を求めた。結果の統計処理は、統計ソフトSPSSを用いた。

図4に自然活動実習参加者全員の平均値を、図5に森林レクリエーション



(図4) 自然活動実習参加者全員の平均値



(図5) 森林レクリエーションコース参加学生

ンコース参加学生の結果を示した。

実習における学生の目標達成は、「自然についての理解」、「仲間づくり」、「コースにおける技術の向上」、「自分自身についての発見」の4項目について注目して調査している。5段階評価で示した値は、他のコース（登山、高山植物観察、カヤック、チャレンジ）を含む全体の値と比較して顕著な差は認められなかった。4項目全てにおいて、「かなり達成できた」と考えている4.0前後の値を示しており、目標の達成はほぼ満足されていると考え

られる。

全体に比して、宿舎での生活が低く表れているのは、森林レクリエーションコースの特徴でもある出作り小屋の利用が関係していると考えられる。出作り小屋に関しては、現地の方の所有物件を借用するかたちで利用しているが、準備に割ける時間等が限られているため、学生の想像との食違いが生じていると考えられる。もう少し長期の利用方法であるとか、学生自身が作り替える様式の授業が実施出来るならば、また異なった評価が得られるものと考えている。作業をし、宿泊をし、調理をした出作り小屋における健康管理や仲間づくりが、高く評価されていることから、出作り小屋の存在は、学生たちに何らかの心理的安定感を与える要素を持っており、今後重要な要素となると考えられる。

下草刈り作業に必要な技術として鎌の取り扱いや手入れ方法の実習などもあり、このような技術について指導を受けると、不足している技術等に学生は気がつきはじめ、技術向上の評価が高くでることは少ないと考えられるが、自然に関する知識の向上とともに、技術の向上についても達成できたと評価していることは、プログラムがうまくいっていることを示唆している。

全体的には、学生の満足度は高くあらわれ、実習に参加すれば自然の中での活動が意義のあることを認識するようである。最近の学生の傾向として、授業を含めて多くの学生の主体的活動に積極的に参加することに対して非常に臆病であることが観察される。授業に関しても登録モデルのようなものを示されれば、その通りを記入して履修する方が楽だと考え、自分の興味や意志を尊重する行動に出るものは極めて少ないと考えられる。H.D.大学の法学部においては、そのような消極的な学生の態度に早くから気がつき、新生生に対して入門演習という講座を必修で設置し学生の教育の教科をはかっている。著者らもその取り組みに協力して、学生の担当を受け持ったが、学内の学生間のコミュニケーションを取る方法としても、野外教育の手法はたいへん有効であった。

この森林レクリエーションプログラムは、単に自然の中でアウトドアスポーツ種目の技術を高めるという目標ではなく、自分と自分自身をとりまく自然（自然環境）や人（社会環境）との関係を感じとり、学習してこうというねらいをもっている。森林レクリエーションプログラム全体としての評価も4.0以上の評価がなされており、新しい試みとしてのプログラムの授業展開は、確実に参加学生の評価に表れていると考えられる。

しかし、事前の授業における評価は、全体的に低くあらわれる傾向にあり、森林レクリエーションプログラムとして与えるべき内容の選択が難しいことが示された。実際の実習は3泊4日の短期間で実施され、多くの情報を事前の授業で与えても、未消化に終わる部分が多く、より吟味した内容の展開が必要となる。

VI. まとめ

本研究で取り上げた森林レクリエーションとは、山野を利用した自然活動実習の中で、単に自然環境を理解し、楽しみ、人間が恩恵を受けるという実習のみでなく、私たち人間が自然に対して何か出来るのではないかということを考えて、白山周辺のブナ林を保護する活動を積極的に取り入れた野外活動プログラムである。発案当初は、単純に用材としてのスギやヒノキの林の営林作業の実施を考えていたが、自然保護という要素を受入れて、ブナの林の営林作業へと転換をはかることが出来た。

森林レクリエーションにおいての活動において、学生は森林を舞台に多くの体験を積み重ね、白峰村御前荘周辺の夏緑広葉樹林（ミズナラ、ブナの林）、白山周辺の山集落の防雪林や雪崩防止林として保存されているブナの林、白山自然保護センターの事業として植林されたブナ植林地、オニグルミの林などを知ることが出来て、本物の自然にふれることの重要性、なぜブナ林が重要なのか、自然林と人工林の違い、ニホンザルやカモシカと人間の関わりなどを、自然体験を通じて理解していくことが出来た。

主たる作業となったブナ林の下草刈りについても、下草刈り用のカマを

片手に、ブナの幼木を確認しながらの緻密な作業であり、ブナよりもそれ以外の雑草（一年生、多年生草本類）やクズ・フジをはじめとするツタ、ツル植物の方が繁茂することを確認し、単純に植林をすれば良いだけでなく、その後の作業の重要性を認識できた。作業中はハチやマムシなどの動物にも遭遇する可能性もあり、安全面にも配慮が必要ではあるが、環境教育や自然教育の観点からも重要な教育効果を引出すことができることを認識できたことは重要な成果であった。

神山¹³⁾は健康と自然環境について、自然環境の意義について、都市から離れた山、森、林、海、温泉などの自然環境と健康との関わりについて、人間が生産活動に疲れたとき、山に入り森に入って自然環境からの刺激を受けて、その疲れた体や心を癒してきたことを強調している。山遊びの行事はもちろんのこと、宗教的な行事として知られている講、修験道、山伏、遍路なども山や森のきびしい自然環境を積極的に利用するレクリエーションであると認めている。

本研究で取り上げた白山山麓の白峰村は、きびしい自然環境の中を耐えて生き続けてきた人々が、手取り川ダムという電力供給事業や水道用水供給事業、工業用水供給事業を、石川県が積極的に推進し、開発の大きな影響を体験している地域でもある。中西¹⁴⁾は、白峰村手取り川ダム誌において、手取り川ダムのために営々として受け継いできた父祖伝来の生活の場を、緊張と不安の中で離れた345戸の多くの人たちの尊い犠牲を忘れてはならないと書き記しているが、環境教育の一環としては、歴史的背景も考慮に入れた授業の展開を考えていきたいものである。

白山山麓はまた、宗教的にも重んじられてきた地域でもある。白山は日本の高山帯の西端にある単独峰であることから、歴史的に宗教登山の対象としてその存在が認められている。環境教育の立場から考えれば、地球環境への感謝がなぜ必要かを説きつつ、これからの人類の方向性を考えさせる必要がある。

以前の日本人は、山はありがたい、川はありがたい、太陽はありがたい、

身体運動文化論攷 (3), 2004

大地はありがたい、お水はありがたいという大自然への感謝の心で生きてきており、身近にある巨樹や、森林や、山や、湖沼を、神々の住まう場として敬ってきた歴史を持っている。自然の中に神々や精霊が宿るというこのような世界観は、アニミズムと呼ばれるが、加藤¹⁵⁾は環境倫理学という考えの中で、ゴミと自然観について、アニミズムの立場から東洋の自然観に注目をしている。アニミズムは、宗教の原初的形態と考えられているが、現代人が考えるような、自然は人間が勝手に利用したり搾取してかまわない資源であり道具と考えることにも多くの問題が蓄積している。学生に提供する授業においては、是非自然と人間の関わりを自然の中において実体験をもとにして考える能力を培ってもらいたいと考えている。

【参考文献】

- 1) 岩波書店編集部編：教育をどうする，岩波書店，東京，5-28，1997.
- 2) 池谷壽夫，後藤道夫，竹内章郎ら：競争の教育から共同の教育へ，青木書店，東京，1-12，1988.
- 3) 鷺田小彌太：考える力の冒険?自分と向きあう哲学ノート Philosophical Encounters with My Past? : PHP研究所，東京，pp24-30，1994.
- 4) チェスターフィールド：わが息子よ，君はどう生きるか?父親が息子に贈る人生最大の教訓? : 三笠書房，東京，pp195-198，1988.
- 5) 島田晴雄：会社や仕事を取り巻く環境はどう変わるか，加藤寛編著：日本経済入門セミナー：日本実業出版社，東京，pp214-250，1991.
- 6) ドナルド・オースター：ネイチャーズ・エコノミー?エコロジー思想史? : リプロポート，東京，pp409-420，1989.
- 7) 日本化学会編：どうする地球環境，大日本図書，東京，pp2-12，1993.
- 8) 藤田英典：教育改革?共生時代の学校づくり?，岩波新書511，東京，pp2-58，1997.
- 9) 今谷順重：子どもが生きる生活科の授業設計，ミネルヴァ書房，京都，pp1-41，1994.
- 10) 伴義孝：体育とは何か?大学改革論議からの発信一，関西大学出版部，京都，pp1-22，1997.
- 11) 伴義孝：生きる力の再発見?あなたの身体は日本人です一，晃洋書房，大阪，pp302-353，1996.
- 12) 姫路獨協大学スポーツ文化：自然活動（山野）実習要項，姫路獨協獨協大学，pp2-3，1998.
- 13) 日本環境学会編集委員会編：環境科学への扉，有斐閣双書Gシリーズ，京都，pp207-224，1984.
- 14) 石川県白峰村：白峰村手取り川ダム誌，北国出版社，石川，序pp1-2，1982.
- 15) 加藤尚武：環境倫理学のすすめ，丸善ライブラリー032，東京，pp88-109，1991.